

## ■ 概況

2/10~2/16のNYMEX・WTI先物市場は、89.88~95.46ドルの範囲で推移した。

2月17日は、イラン核合意の再建交渉について、イラン・米国当局者から、「最終段階」との発言があり、イラン原油の制裁解除の観測から、広く売られ反落した。ただ、ウクライナ情勢の悪化懸念も根強く、下値は固かった。3月限の終値は前日比1.90ドル安の91.76ドル。

週末18日は、引き続き、イラン核合意再建交渉の進展に伴うイラン原油輸出解禁観測から売られ、続落した。為替市場のドル高・ユーロ安や米国株式の下落も、売り要因となった。ただ、ウクライナ情勢の緊迫化が下値を支えた。また、ベーカー・ヒューズ社発表の米国内稼働石油掘削装置は前週比4基増の520基で4週連続の増加。3月限の終値は前日比0.69ドル安の91.07ドル。

21日は、大統領の日の休日につき、休場。

連休明け22日は、前日ロシアが、一方的にウクライナ東部2州の一部の独立承認を行ったことで、ウクライナを巡る情勢が一段と緊迫化し、3営業日ぶりに反発した。一時は、96ドルまで上昇したが、今後の展開を見極めたいとする姿勢も強く、この日最終取引日を迎えた3月限の終値は前営業日比1.28ドル高の92.35ドル。

23日は、ウクライナ情勢を巡る緊迫から、小幅に続伸した。ただ、利食い売りも多かった模様で、イラン核合意再建を巡る交渉進展に伴う、イラン原油輸出解禁観測による売りもあり、上値は重かった。4月限の終値は前日比0.19ドル高の92.10ドル。

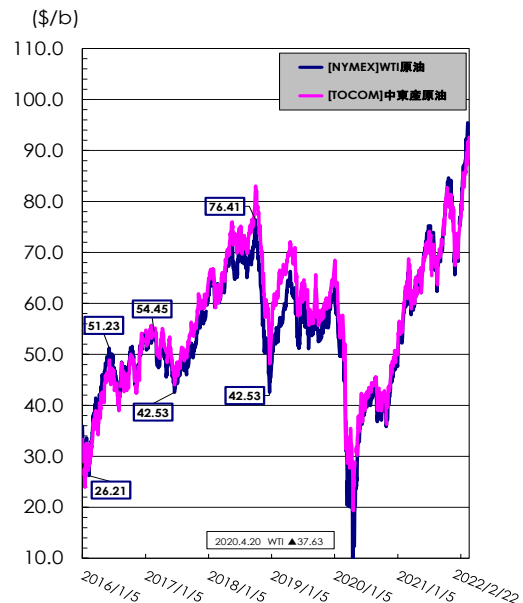
アジアの指標原油である中東産ドバイ原油/東京市場(4月

渡し)は、2月10日~16日の間、89.80~93.90ドルの範囲で推移した。2月17日91.20ドル、18日90.50ドル、21日91.20ドル、22日95.50ドルで推移した。

為替は、2月10日~16日の間、115.42~115.70円の範囲で推移した。2月17日115.48円、18日114.95円、21日115.06円、22日114.79円で推移した。

そのような中で、2月21日時点の小売価格は、ガソリンが前週比0.6円の値上がり、軽油は同0.5円の値上がり、灯油は9円の値上がり(18%ベース)であった。ガソリンは7週連続の値上がり、軽油も7週連続の値上がり、灯油も7週連続の値上がりとなった。ガソリンの全国平均価格は、172.0円と今週からの基準価格(171円)を上回り、引き続き、燃料油価格激変緩和対策が発動されたが、補助金支給額は、前週に続き、上限の5円。

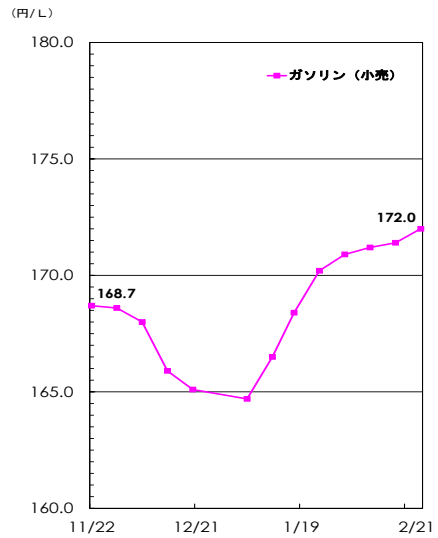
原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	2/13 ~ 2/19	3,133 ▲ 53	▲ -
	トッパー稼働率 (%)	"	81.4 ▲ 1.4	▲ -
	原油在庫量 (千kl)	2/19	9,054 ▲ 115	▼ -
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	2/21	88.68 ▼ -3.04	▲ 27.0
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	2/22	92.35 ▼ -3.11	▲ 30.9
	原油CIF単価 (\$/bbl)	1月下旬	79.34 ▼ -0.69	▲ 29.22
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	57,357 ▼ -708	▲ 24,711
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	114.94 ▲ 0.41	▼ -11.39
	外国為替TTSレート (¥/\$)	2/21	116.06 ▲ 0.37	▼ -9.56



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	2/13 ~ 2/19	854 ▼ -60	▼ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	762 ▲ 81	▼ -	
	輸出	"	75 ▼ -83	▲ -	
	在庫	2/19	1,752 ▲ 17	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/15 ~ 2/21	79.3 ▲ 0.6	▲ 25.6	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	2/15 ~ 2/21	79.1 ▼ -0.4	▲ 26.7
		(TOCOM/中部)	2/21	78.2 ▼ -3.8	▲ 23.9
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/21	172.0 ▲ 0.6	▲ 28.9	

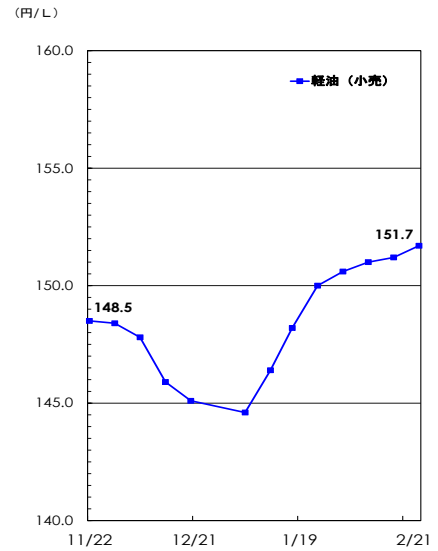
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

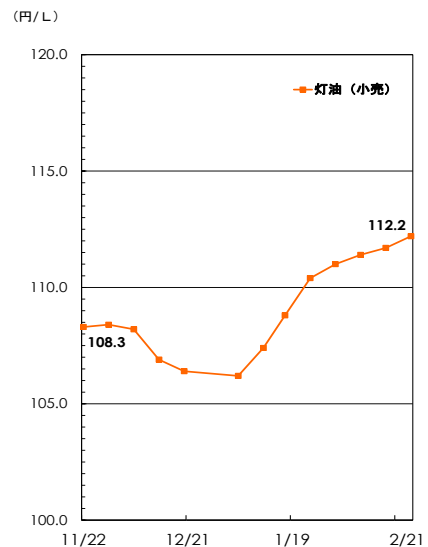
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	2/13 ~ 2/19	693 ▼ -43	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	555 ▼ -52	▼ -	
	輸出	"	190 ▲ 131	▲ -	
	在庫	2/19	1,296 ▼ -52	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/15 ~ 2/21	80.4 ▲ 0.7	▲ 23.8	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	2/15 ~ 2/21	84.7 ▲ 0.6	▲ 26.4
		(TOCOM/中部)	2/21	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/21	151.7 ▲ 0.5	▲ 28.3	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	2/13 ~ 2/19	334 ▼ -48	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	475 ▼ -80	▲ -	
	輸出	"	0 ➡ 0	➡ -	
	在庫	2/19	1,286 ▼ -141	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	2/15 ~ 2/21	80.3 ▲ 0.8	▲ 24.2	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	2/15 ~ 2/21	80.3 ▼ -0.1	▲ 25.6
		(TOCOM/中部)	2/21	81.0 ▼ -1.5	▲ 25.0
	小売 [週動向] (資工庁公表)	2/21	112.2 ▲ 0.5	▲ 26.4	



■ 関連情報

1 海外/原油

2月23日のNYMEX先物原油は、前日、ロシアによるウクライナ東部の一方的独立承認に関連し、ドイツ政府がロシアからの天然ガスパイプライン「ノルドストリーム2」の承認手続きを停止、バイデン大統領は対口段階的経済制裁を示唆するなど、さらなるエネルギー需給ひっ迫懸念から、続伸した。ただ、利食い売りや為替市場でのドル高・ユーロ安進行に伴う割高感の売りも多く、イラン核合意を巡る協議の進展観測に伴う経済制裁解除観測も根強かったことから、上値は重った。なお、米エネルギー情報局(EIA)の先週末時点での米国石油在庫は、休日の関係で、一日遅れの24日の予定。この日から取引の中心限月となった4月限の終値は、前日比0.19ドル高の92.10ドル。5月限は0.30ドル高の90.69ドルだった。

EIAによると、2月21日時点のガソリンの小売価格は、前週比4.3セント値上がりの1ガロン3.530ドル(108.1円/ℓ)、ディーゼルは同3.6セント値上がりの4.055ドル(124.2円/ℓ)となった。ガソリンは8週連続の値上がり、ディーゼルは7週連続の値上がりとなった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2022年2月13日～2月19日に休止したトッパー能力は15.5万バレル/日で、前週に対して11.5万バレル/日減少した(全処理能力は345.8万バレル/日)。

原油処理量は313.3万klと、前週に比べ5.3万kl増加。前年に対しては50.9万klの増加。トッパー稼働率は81.4%と前週に対して1.4ポイントの増加、前年に対しては13.2ポイントの増加となった。

生産は前週に比べてジェットが増産、その他の油種で減産となった。ガソリン/6.6%減、ジェット/2.3%増、灯油/12.5%減、軽油/5.9%減、A重油/10.6%減、C重油/30.6%減。今週のC重油の輸入は0.0万kl(前週比7.1万kl減)。軽油の輸出は19.0万kl(前週比13.1万kl増)。

出荷(輸入分を除く)は前週比でガソリン、ジェット、A重油が増加し、その他の油種で減少した。前年比ではガソリン、軽油が減少し、その他の油種で増加した。ガソリンの出荷は76.2万kl(対前週12.0%増)と2週振りに増加した。ジェット12.1万kl(対前週223.0%増)、灯油47.5万kl(対前週14.4%

減)、軽油55.5万kl(対前週8.5%減)、A重油26.4万kl(対前週8.8%増)、C重油23.8万kl(対前週11.5%減)。

(単位:千kl)

	今週 (2/13 ~ 2/19)	前週 (2/6 ~ 2/12)	前週比	
ガソリン	762	681	▲ 81	(12%)
ジェット燃料	121	37	▲ 84	(227%)
灯油	475	555	▼ -80	(-14%)
軽油	555	607	▼ -52	(-9%)
A重油	264	243	▲ 21	(9%)
C重油	238	268	▼ -30	(-11%)
合計	2,415	2,391	▲ 24	(1%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

2月19日時点の在庫は、ガソリンが積み増しとなり、その他の油種で取り崩しとなった。前年に対してはジェットが増加し、その他の油種で減少となった。

ガソリンは175.2万kl、前週差1.7万kl増。前年に対しては21.2万kl少ない。

灯油は128.6万kl、前週差14.1万kl減。前年に対しては38.1万kl少ない。

軽油は129.6万kl、前週差5.2万kl減。前年に対しては26.1万kl少ない。

A重油は67.2万kl、前週差2.9万kl減。前年に対しては3.5万kl少ない。

C重油は163.7万kl、前週差11.8万kl減。前年に対しては19.9万kl少ない。

(単位:千kl)

	今週 (2/19)	前週 (2/12)	前週比	
ガソリン	1,752	1,735	▲ 17	(1%)
ジェット燃料	736	779	▼ -43	(-6%)
灯油	1,286	1,427	▼ -141	(-10%)
軽油	1,296	1,348	▼ -52	(-4%)
A重油	672	701	▼ -29	(-4%)
C重油	1,637	1,755	▼ -118	(-7%)
合計	7,379	7,745	▼ -366	(-4.7%)

### 3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

2月15日～21日の指標原油価格は前週比で値上がりし、為替レートはわずかに円高で、元売会社の原油コストは、1.0円値上がりしたものと見られる。

値上がりとなった模様。

上記コストアップに加え、前週の補助金額5.0円を加えたコスト上昇額6.0円に、補助金5.0円が支給されることから、次週(2/24～3/2)の元売り会社の実質的な卸価格は1.0円の

### 3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

2月15日～21日の製品スポット市況は、2月8日～14日平均と比べ、ガソリンと灯油の先物取引での値下がりを除き、他の油種・取引で値上がりした。

直近週(2/15～2/21)の陸上スポット価格平均値は、前週(2/8～2/14)比で、ガソリンは0.6円の値上がり、灯油は0.8円の値上がり、軽油は0.7円の値上がりだった。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、直近週(2/15～2/21)に、前週(2/8～2/14)比で、ガソリンは、0.4円の値上がり、灯油は0.9円の値上がり、軽油は0.4円の値上がりだった。

先物価格の平均は、前週比で、ガソリンは0.4円の値下がり、灯油は0.1円の値下がり、軽油は0.6円の値上がりだった。

(RIM) (単位: 円/%)

[陸上ローリー 4地区平均]	今週 (2/15～2/21)	前週 (2/8～2/14)	前週比
	レギュラー	79.3	78.7
灯油	80.3	79.5	▲ 0.8
軽油	80.4	79.7	▲ 0.7

(TOCOM) (単位: 円/%)

[期近物/終値 [平均]]	今週 (2/15～2/21)	前週 (2/8～2/14)	前週比
	レギュラー	79.1	79.5
灯油	80.3	80.4	▼ -0.1
軽油	84.7	84.1	▲ 0.6

※上記価格は税抜き価格

参考値 (2/15～2/21実績値) (単位: 円/%)

油種	現物	先物	平均
ガソリン	▲ 0.6	▼ -0.4	▲ 0.1
灯油	▲ 0.8	▼ -0.1	▲ 0.3
軽油	▲ 0.7	▲ 0.6	▲ 0.7
A重油	▲ 1.0		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

### 4 国内/製品小売価格

2月21日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週比0.6円高の172.0円、軽油は同0.5円高の151.7円、灯油は18%ベースで9円高の2,020円(1%ベースでは同0.5円高の112.2円)。ガソリンは7週連続の値上がり、軽油も7週連続の値上がり、灯油も7週連続の値上がりとなった。

次回調査時(2/28)のガソリンの小売価格を、補助金を上回る原油価格上昇が見込まれることから、値上りが予想される。

ガソリンについて、都道府県別には、値上がりは38都府県、横ばいは2県、値下がり7道県だった。全国最安値は岡山県の166.0円、その次は徳島県の166.8円であった。他方、最高値は鹿児島県の180.4円だった。最も値上がりしたのは宮城県(前週比2.0円高)で、横ばいは滋賀県・徳島県の2県、最も値下がりしたのは香川県(前週比2.0円安)だった。

(単位: 円/%)

(資工庁公表) [週動向]	今週 (2/21)	前週 (2/14)	前週比	直近高値
レギュラー	172.0	171.4	▲ 0.6	08/8/4 185.1
灯油	112.2	111.7	▲ 0.5	08/8/11 132.1
軽油	151.7	151.2	▲ 0.5	08/8/4 167.4

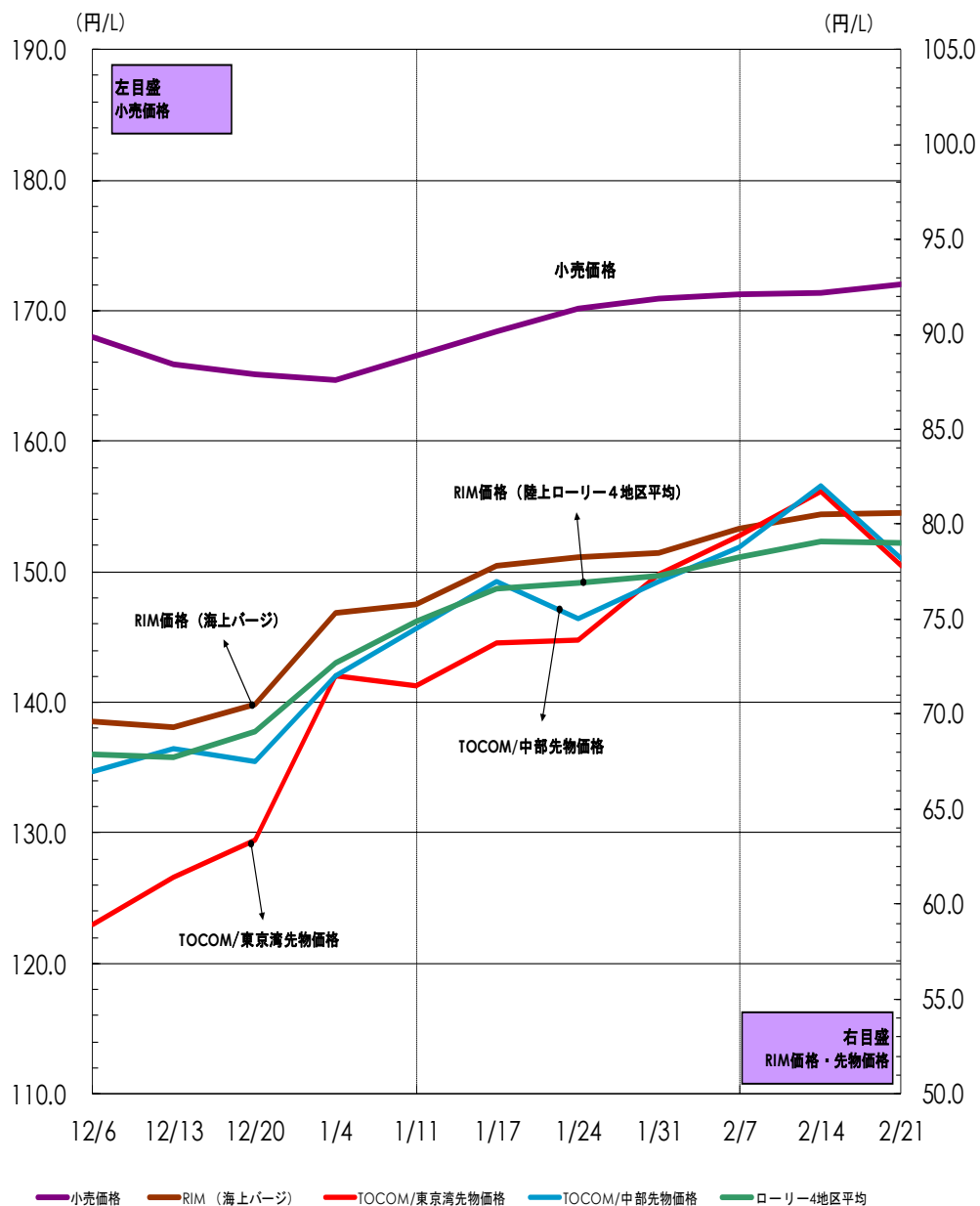
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

# ガソリン価格推移

(2021/12/6 ~ 2022/2/21)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格  
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

## ■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。  
次回(2021第46号)の公表は、3/4(金)14:00です。

### 本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。

当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。

また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

### 「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。

当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

### 本レポート掲載データの出所について

#### ①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。

「出荷」は当センターの推計。

#### ②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。

中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」

中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM(Telegraphic Transfer Middle rate : 中値)を採用。

原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値)を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

#### ③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

#### ④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

#### ⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾及び中部石油製品期近物・終値を採用。

TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

#### ⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁-HPIに掲載)。